2023年度一般入学試験問題

国　　語

（2月7日）

開始時刻　　午後1時00分

終了時刻　　午後2時00分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は17ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督員の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

   ①　受験番号欄

   受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

   ②　氏名欄

   氏名とフリガナを記入してください。
4. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、 10 と表示のある問いに対してⓒと解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答欄のⓒにマークしてください。

   （例）

10	ⓐ ⓑ ●ⓒ ⓓ ⓔ

5. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題訂正

冊子1ページ　一　の9行目

・・・・はたらきが先だつこと・・・・を

・・・・はたらきがさらに先だつこと・・・・に

訂正する。

一

次の文章を読んで、**問一**～**八**に答えなさい。

哲学は総じて根源、つまり、なんらかの意味で「他の事柄に対して先だつもの」を探求します。たとえば、「宇宙の始まりはどのようなものか」という自然哲学の問いは、現在の宇宙のすべてに時間的に先だつものに向けられます。また、「法律はなぜ妥当性を持つのか」という法哲学の問いは、個々の法律の条文に先だって、そもそも法律が法律として意味を持つための条件に向けられます。古代ギリシアでは、これらの先だつものをまとめて「アルケー」とよびました。なお、現代には、根源を問うことの無意味さや暴力性を指摘する、やや屈折した哲学者もいます。

とはいえ、宇宙や法律の成りたちを探るだけなら、宇宙学者や法学者のほうがよくできそうです。彼らは実際に宇宙を観察し、法律の条文に日々取りくんでいるのですから。それでは、いかにも哲学にふさわしいテーマとはなんでしょうか。それは、宇宙であれ法律であれ、その他なんであれ、あらゆる他の事柄よりも先行する究極の先だつものを問うことです。これについて、哲学のおよそ２６００年の歴史においてさまざまな答えが出されました。これらの答えの多様性には、古代から現代にいたる哲学史上のチカク変動が映しだされています。以下では、それらの解答を概観したうえで、そうした伝統的な先だつものに対して、「問う」はたらきが先だつことを説明します。

大きくまとめると、哲学の歴史において、究極の先だつものは二種類の順序において考えられてきました。アリストテレスの表現もあわせて言うと、それは「存在の順序」――本性において先なるもの――と「認識の順序」――我々にとって先なるもの――の二つです。

存在の順序とは、何かが存在するために前提されるものの順序です。たとえば、東京駅もウォンバットも、三次元に広がる物体がなければ存在できません。このとき、存在の順序で、［X］は東京駅やウォンバットに先だちます。そうすると、この順序における究極の先だつものとは、物体はもちろん、三角形のような数学的対象や、シャーロック・ホームズのようなフィクション中の人物をもふくめて、あらゆる種類の存在者にとって存在するために前提されるものとなります。それはいかなるものでしょうか？　この問いへの古典的な解答は、「存在」を挙げるものです。

存在とは「ある」ということです。［　　Y　　］存在を主題とした最初の哲学者は、先ソクラテス期の哲学者パルメニデス（紀元前５１５頃‐前４４５頃）です。彼は、流れさった過去もこれからやってくる未来もない「永遠の今」として、存在を性格づけます。【①】なぜなら、過去も未来もある意味で存在する以上、「ある」は時間的に過ぎさって非存在に変わることがなく、いつでも現前するからです。やや後の世代に生まれたプラトンは、こうした存在概念を引き受けて、刻一刻と流れさる感覚の現れを超える同一性――机そのもの、善そのもの――によって存在者をそれとしてあらしめるイデアの概念を提唱しました。【②】また、彼の弟子だったアリストテレス（紀元前３８４‐前３２２）は、イデア論を批判的に受けつぐ形で、「何であるか」を定める形相（エイドス）を、感覚される実体（ウーシア）に内在化させ

ました。【③】

また、存在だけでなく、神も存在の順序における先だつものとみなされました。【④】アウグスティヌス（354‐430）やトマス・アクィナス（1225頃‐1274）に代表される中世哲学は、プラトン――ないし新プラトン主義――とアリストテレスを継承しつつ、キリスト教などの一神教における「無からの創造」説に接続しました。ここから生まれたのは、万物の本質――イデアや形相――を設計するだけでなく、それを現実に存在させるもの、つまり、万物に存在を贈与するものとしての神の概念です。【⑤】こうして古代と中世の哲学では、概して存在の順序にしたがって、先だつものが探求されました。

これに対し、認識の順序とは、認識するものにとって事柄がとらえられる順序、つまり、把握して理解する営みが成立する順序です。たとえば、自然界とわれわれ人間で考えましょう。当然、自然界の物質が存在しなければ人間も存在しません。ですから、存在の順序で、自然は人間に先だちます。しかし、「自然は人間に先だつ」と主張するためには、B それに先だってさまざまなことを理解していなければなりません。たとえば、「自然と人間は等しく物質でできている」や、そもそも「人間には身体と精神がある」などの理解です。つまり、もっとも手近な話題である人間について理解していてはじめて、人間と自然の関係へと理解を広げられるわけです。そして、哲学史上、この認識の順序で他のすべてに先だつとされたものは「自我」です。*

自我とは、思考や知覚のような世界に向かう活動のイニナい手、しかも、自分をそれと自覚できるニナい手です。よく知られた例を借りると、蜜蝋（みつろう）を見るとき、見ている当人は［Z］を理解しています。蜜蝋を見る動作の主体、つまり自我として自分を理解するわけです。それではなぜ、認識の順序で、自我は先だつものとなるのでしょうか。その答えをもっとも表明的に与えたのが、C 近代哲学の出発点となったルネ・デカルト（1596‐1650）です。皆さんにも馴染み深い「我思う、ゆえに我あり」を想起してください。デカルトは、絶対に確実な知識を求めて、少しでも疑えるものは存在しないと想定するコチョウ的懐疑をおこない、目や耳による感覚的認識や、数学の知識、さらには世界の実在までも疑いました。しかし、最後に彼は「疑っている自分自身の存在は疑えない」という洞察に達します。これが「我思う、ゆえに我あり」というコギト命題の意味です。そこから彼は、自我（「エゴ」）が思考する内容（「観念」）にそくして、神と自然の実在を証明しようとしました。そうすると、現代を代表する哲学史家のジャン＝リュック・マリオン（1946‐）が言うように、デカルトの論理において、第一かつ絶対確実に認識されるものが自我だから、まず自我の認識から出発して、次にそれ以外の存在者へと認識が広げられるわけです。このデカルト革命により近代哲学は、主観的意識から客観的世界へのアクセスを再構築するように方向づけられました。これはいわば認識の順序にしたがった哲学探求です。

（景山洋平『「問い」から始まる哲学入門』による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

問一　傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 1 、イが 2 、ウが 3 。

ア　チカク

ⓐ カク実験が繰り返される
ⓑ コウカク類の展示
ⓒ カメラのガカクに収まる
ⓓ カクリョウ会議が行われる
ⓔ 返却期日をカクヤクする

イ　ニナい手

ⓐ タンカで運ばれる
ⓑ タントウ直入に尋ねる
ⓒ 絵具でノウタンをつける
ⓓ タンセイな身のこなし
ⓔ 一年の計はガンタンにあり

ウ　コチョウ

ⓐ 風船がフクらむ
ⓑ 仲間をヨぶ
ⓒ チイさな靴
ⓓ 油がカタまる
ⓔ 仕事にホコりをもつ

問二　傍線部A「他の事柄よりも先行する究極の先だつもの」とはどのようなものか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 4 。

ⓐ 宇宙のすべてにおいて時間的に先だつもの
ⓑ 古代ギリシアにおける「アルケー」に該当するもの
ⓒ 古代から現代に至る過程の哲学史上の様々な答え
ⓓ ある事柄よりも順序的に先だつものすべて
ⓔ ものの本性と認識主体にとって先なるもの

問三 空欄 X に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 5 。

ⓐ 前提されるもの
ⓑ 存在者
ⓒ アルケー
ⓓ 三次元の物体
ⓔ 現前する対象

問四 空欄 Y には、次の①～④の各文が入る。正しい順に並べるとすれば、どれが最も適切か。次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 6 。

① もちろん、シャーロック・ホームズは物体と同じようには存在しませんが、少なくともそれについて「探偵である」と語れます。
② 東京駅もウォンバットも「ある」し、三角形もシャーロック・ホームズもそれぞれ「あり」ます。
③ この点で、「存在」は存在の順序においてあらゆる存在者に先だちます。*
④ このように「ある」はなんであれ、あらゆる存在者に等しく当てはまる概念であり、また、あらゆる存在者がそれぞれのしかたで成立するときにかならず前提とされる事実です。

ⓐ ①→②→③→④
ⓑ ①→②→④→③
ⓒ ②→①→③→④
ⓓ ②→①→④→③
ⓔ ②→④→①→③

問五　次の文は本文の【①】～【⑤】のどこに入る文か。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 7 。

この場合、たとえば机を机たらしめる本質は、目で見て手で触れられる個々の机のうちにあることになります。

ⓐ【①】
ⓑ【②】
ⓒ【③】
ⓓ【④】
ⓔ【⑤】

問六　傍線部B「それに先だってさまざまなことを理解していなければなりません」とあるがそれはなぜか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 8 。

ⓐ「自然は人間に先だつ」と主張するためには、自然と人間の関係性を理解していなければならないため。
ⓑ「自然は人間に先だつ」と主張するためには、そのように発言したり認識したりする人間についての認識が不可欠であるため。
ⓒ「自然は人間に先だつ」と主張するためには、人間より先に自然が存在することが証明されている必要があるため。
ⓓ「自然は人間に先だつ」と主張するためには、人間にとって自然がどのような価値があるかを知っておくことが求められるため。
ⓔ「自然は人間に先だつ」と主張するためには、その前提となっている存在に目を向けることが重要であるため。

問七　空欄 Z に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 9 。

ⓐ　自分が蜜蜥を見ていること
ⓑ　自分が見ているものが蜜蜥であること
ⓒ　自分が現実の世界に生きていること
ⓓ　自分が認識の主体として優れていること
ⓔ　自分が人間であること

問八　傍線部C「近代哲学の出発点」であると言えるのはなぜか。その説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 10 。

ⓐ　「疑っている自分自身の存在は疑えない」という発見が、古代哲学に見られない考え方であるため。
ⓑ　「我思う、ゆえに我あり」という命題により、自我を定位することができたため。
ⓒ　自我が思考する内容にそくして、神と自然の実在を証明することができたため。
ⓓ　把握して理解する営みが成立する順序において、自我が究極的に先だつとされたため。
ⓔ　自我を起点として客観的な世界を理解するという新たな哲学が可能になったため。

二

次の文章を読んで、**問一**～**六**に答えなさい。

民俗学とは、人々の「せつなさ」[A]と「しょうもなさ」に寄り添う学問ではないかと思っている。そういう物言いは、あまりに文学的に過ぎるだろうか。「せつなさ」とは、人々がそれぞれ生きる時代や地域や状況のなかで、ひたむきに忍耐と工夫を重ね、一生懸命に「日々の暮らし」を営んでいることへの感嘆と讃辞（さんじ）である。その一方、そうした人々が、しばしば心無い差別や抑圧や暴力の被害者となり、逆に加害者となり、あるいは無責任な傍観者となる。そして、その過ちに学ぶところなく、あるいは、学んでもすぐに忘れてしまい、また同じ過ちを繰り返す。そういった人々が抱え込む「しょうもなさ」も、残念なことに認めざるをえない私たちの世界の一面である。「せつなさ」と「しょうもなさ」は、人間世界にあざなえる

X

のごとく立ち現れる。その厄介な混沌（こんとん）から目を背けることなく、一つ一つの因果関係を解きほぐし、「しょうもなさ」の克服に挑み続けること、そのための健全な認識力と実践力を育むことこそが、民俗学という学問の初志である。

私たちの日々の暮らしは、さまざまな営みが縦横無尽に交錯した膨大な累積である。私たちは、食べたり、着たり、住んだりしないわけにいかないし、そうした消費生活を実現するためには、働いてその成果を必需と交換すべく、さまざまな生産と流通の営みが必須となる。そしてそこには、小は家族から大は地球社会に至るまで、さまざまな規模と構造をもつ人間関係が不可避的に介在する。このような人々の生きる営みは、近代以降、「資本主義」という名のドラスティック（注1）かつグローバルな社会変容によって決定的に変質し、そしてそのプロセスは今なお続いている。私たちは、時に一抹のアンソク（ア）を覚えつつも、食べ物から仕事場から人間関係にいたるまで、ありとあらゆる局面をめぐって、漠然とした、あるいは歴然とした不安や不満に直面しつつ、日々の暮らしを営んでいる。

それ[B]がどのような経緯で「現在」へと至ったのか。そこから不安や不満を取り除くにはいかなる処方箋が有効なのか。この超難題に立ち向かうために民俗学が発見した糸口が、「民俗資料」という新たな資料である。それは何か。あらかじめ結論を述べると、それは「私（たち）」のことだ。「私（たち）」が、いま、ここで、このように生きている。そのこと自体が、どれほどささやかなものであるとしても、まぎれもなく人類の「歴史」の一部分である。であるならば、「私（たち）」に刻み込まれているはずの「歴史」を引きずり出し、その来歴と性質を明らかにすることも、原理的に不可能ではないはずだ。この「私（たち）が資料である」というコペルニクス（注2）的転回こそが、民俗学という学問による最大の方法論的貢献である（と筆者は思う）。

このことは、必然的に、己の持つ五感を総動員して対象にアプローチする身体レベルの方法論を要請する。それが、「三部分類」である。目で見えるがゆえに何人にも観察可能となる「有形文化」。言葉で語られるがゆえ、耳を傾けるための言語習得が必須となる「言語芸術」。目にも見えず、耳

でも聞こえないため、当事者が自らの心の内に分け入るほかない「心意現象」。民俗資料の存在形態、認識に動員する感覚とメディア、採集をになう主体の属性を整理したこの図式は、「民俗資料」というフロンティアを切り拓かんがために編み出された、等身大でありながら全面的に「世界」と渡り合うための、渾身の知的サバイバル・ツールなのだ。*

普通の人々の日々の暮らしをまるごと捕まえようとする大胆な問題意識。それは、対象を限定することで精緻化を試みる通常の学問分野の規範からすれば、ほとんど蛮勇なのかもしれない。しかし、既存の学問分野の分節からこぼれ落ちる〈生きること〉の原形のようなものを掬い取ろうとするなら、その蛮勇にあえて飛び込まなければいけない。複雑極まりないリアルな世界のもつゴツゴツとした質感にこだわり続けること。それは、ディシプリン(注3)の分節化に疑問符を突き付ける〈アンチ・ディシプリン〉なのかもしれないし、その果てに新たなディシプリンを胎動させていく〈プロト・ディシプリン〉なのかもしれない。C そんな地平にこそ、民俗学の可能性は発動する。

本書は、そうした民俗学という企図のエッセンスを、筆者のささやかな知識と経験に基づきながら、可能な限り簡潔にイジョジュツしようとするものである。ついては、いくつかの方針を掲げておくと、

①基本概念を確認すること
②民俗学の古典に学ぶこと
③特殊と普遍を往還すること
④人類史・自然史を見据えること
⑤前近代／近代／現在という流れを踏まえること

等々を目論んでいる。これまた、「新書」という容量を考えると、あまりに無謀かもしれない。

そもそも、浅学菲才の筆者がこうした課題に挑むこと自体、どう考えても無謀だ。正直、もっとキチンと研究を重ねてから取り組みたかったと思っているのだが、とはいえ、それではいつまでたっても書き出せないだろうことも容易に想像がつく。ここは腹を決めるしかない。民俗学が「等身大の Y 」への挑戦だとするなら、巨大な世界に対峙して自らの卑小さに茫然とすることも、避けて通るわけにはいかないステップには違いないのだから。

（菊地暁『民俗学入門』による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

（注）1　ドラスティック――激烈であるさま、過激なさま。
2　コペルニクス的転回――ものの考え方ががらりと正反対に変わること。
3　ディシプリン――学問分野。

問一　傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 11 、イが 12 。

ア　アンソク

ⓐ　ヘイソクした時代
ⓑ　オクソクでものをいう
ⓒ　ソクセキのスピーチ
ⓓ　条件がジュウソクする
ⓔ　動物のセイソクする場所

イ　ジョジュツ

ⓐ　選挙戦のジョバン
ⓑ　官職にジョニンする
ⓒ　面目ヤクジョ
ⓓ　ジョヤの鐘
ⓔ　ジョコウ運転

問二 傍線部A「『せつなさ』」とあるが、この表現に見える筆者の考えはどのようなものか。それを説明したものとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 13 。

ⓐ 自分なりに工夫や努力をして生きていても、人生には思いがけない不幸や事故という落とし穴があり、どうにもならないことが多い。それでも耐えて生きていく人々の姿は確かに立派ではあるが、時に胸をしめつけられるような気持ちにもなるだろう。

ⓑ 差別や暴力の被害者になることもあれば、自分が加害者になることもある。あるいはただ傍観するだけになることもある。そう考えて、人生に起こる害悪は仕方がないことだとあきらめて生きるしかないことは、希望が見えずせつないことだ。

ⓒ 日々の暮らしの中で問題が起こったときに因果関係を探ったり、自分の弱点の克服に挑んだりすることは、難しいことであり、誰もができることではないという点で感嘆すべきことだ。そしてまた、このことは切実な問題でもある。

ⓓ 生きている時代や地域あるいは状況の中で、時に忍耐しながら乗り越え、時に工夫しながらより良い形を模索して生きていくことは、傍から見るとあまりにも真面目で、愚かにさえ映る。それを見ている側は何もしてあげられないのでせつない。

ⓔ 民俗学では、その人自身が資料であるという立場を取るため、その人が人生や生活の中で「せつない」と思った経験や事例を集めることが重要な調査となる。人々のせつなさに寄り添うことが民俗学では大事だ。

問三 空欄 X に入る語句として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 14 。

ⓐ 霧
ⓑ 縄
ⓒ 夢
ⓓ 壁
ⓔ 麦

問四 傍線部B「それ」の指し示す内容は何か。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 15 。

ⓐ 過去

ⓑ 私たち

ⓒ 日々の暮らし

ⓓ 資本主義

ⓔ 社会

問五 傍線部C「そんな地平にこそ、民俗学の可能性は発動する」とあるが、筆者の考えを説明したものとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 16 。

ⓐ 民俗学は、人類の歴史という壮大な歩みを、私という一人の人間から引きずり出そうとする学問で、しばしば無謀な学問だと考えられてきた。しかし、その無謀な試みが自らの卑小さを自覚させ、巨大な世界を再認識させることは避けて通れないステップである。この自覚の発動こそ民俗学の可能性だ。

ⓑ 民俗学は、五感を総動員して対象にアプローチすることで、資本主義がいかに私たちの暮らしを変質させてきたかを明らかにし、そのことで人間の不安や不満を取り除く方法を模索する学問である。既存の学問である経済学とは異なるアプローチをとることが、民俗学の可能性をさらに引き出すと言える。

ⓒ 民俗学は、既存の学問分野ではやらないことをやろうとし、そのための独特な方法論も編み出した。そして、既存の学問ではこぼれ落ちるものを掬い、見出せないものを捕まえられると考えている。このような未知の可能性を秘めているのが民俗学なのだ。

ⓓ 民俗学は、人間の「せつなさ」と「しょうもなさ」に寄り添う学問であり、あらゆる人を見捨てないという立場を取ることで、他の学問とは異なる位置に立ってきたし、またそこにこそ価値がある。このような独自性に民俗学のさらなる発展の可能性が見出せる。

ⓔ 民俗学は、アンチ・ディシプリンであり、プロト・ディシプリンでもあるが、既存のディシプリンと全く異なることをしようとしているのではなく、それらを基礎としながら、五つの方針に則り新たな知見を積み上げていくことを目指す。そして、それが民俗学の良さを最も発揮させることになるのだ。

問六　空欄 Y に入る語句として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 17 。

ⓐ　分節化
ⓑ　自分
ⓒ　学問
ⓓ　暮らし
ⓔ　認識力

三

次の文章を読んで、**問一**～**七**に答えなさい。

私は敢えて老眼鏡を求めなかった。父より余計に生きている以上、眼鏡まで掛けて現実(A)につき合うことはない。近くのものが見えなければ、そんなものは見るな、ということだろう。むしろ私たちはあまり細部を見過ぎるために、かえって遠くを見誤ってしまう。遠くさえ見えれば、それで結構ではないか。近くのものが見えなくなったということは、それだけ私にとっては幸いであろう。少なくとも私の判断力(B)は、近くの細部が見えていたときよりも間違わなくなる筈だから。

そんなわけで、私は老眼鏡を求めない。尤も細字が読めなくなったと云いながら、その実、関心を持つ本などは、いくらちいさな活字でも、ちゃんと眼鏡なしに読んでいるのである。つまり、私の目は得手勝手で、見たいものだけを見、見たくないものは見たがらないのだ。そのお蔭で、見るということが、以前とは違った形(C)のものになった。それも見るのではなく、ただじっと睨んでいるのだ。するとこれまで全く気づかなかったようなことが、不意にわかって来たりする。こんなことなら、もう少し早くから老眼になればよかった、とさえ思うくらいなのである。

私は現在四十七歳で、昔流の数え方では四十八歳、父の年齢を既に三年近く上廻っている。

父が死んだとき、私は数え年六歳だったから、父の思い出はあまりない。

晩年の父、といっても四十四、五歳ごろの父は、一体どんなことに興味を持っていたのか、私はよくそのことを考える。父の興味が、私にもわかる年齢になったと思うからだ。しかし、現在となっては、それも殆ど知りようがない。

ただ私のかすかな記憶では、父は船の銅鑼をいくつか、部屋の壁に吊るしていた。そのうちの一つは、半間の壁に余るほど大きなもので、まわりに火炎のような飾りが取り巻き、緑青の吹き出た表面には、龍の模様が浮き出ていた。何でも支那の船の銅鑼なのだそうで、かなり値打ちのあるものだということであったが、私の憶えているのはただ龍の模様のある大銅鑼だけで、それらの銅鑼は父の死後、誰かがみんな持って行ってしまった。

銅鑼のほかに、父は船金庫も二、三集めていた。船金庫とは、四、五十糎立方くらいの木製の手箱で、縁に黒い鉄の金具が取りつけてあり、扉を開けると、内に抽斗が沢山ある。抽斗は全部鍵が掛かるようになっているが、更に抽斗の奥には、コウミョウ(ア)に細工された隠し抽斗もしつらえてある。*軽い桐材で作られており、船がナンパ(イ)したとき、千石船の船頭はそれを海中に投げ込むのである。

そういう船金庫の知識は、私が最近になって得たものだ。稚い時分の私は、無論それが船金庫だとは知る由もなく、ただ抽斗の沢山ある手箱だと思って見ていたし、事実父は時々扉を開けて、鍵の掛かる抽斗の中からいろんなものを出し入れしていた。

銅鑼といい、船金庫といい、それらは船に関係のあるものだ。父は海には全然関係のない生活をしていたが、一体なぜ、そんな銅鑼とか船金庫とか

いうようなものに、関心を持っていたのであろうか？

銅鑼は船が出帆するときに打ち鳴らされるものだ。父にはひょっとして、誰か別れ難い人と波止場で別れたというような、[X]の思い出でもあったのだろうか。しかしそういう感傷は、父の胸の中にそっとして置いてやるとして、D私が興味を持つのは、銅鑼よりも、むしろ船金庫の方である。

私の家では、大事な書類や物品を保管しておく戸棚は別の場所にしつらえてあり、*父の部屋の床の間に置かれていた船金庫は、単に父が趣味で集めた骨董品（こっとうひん）に過ぎず、父がその中にいろんな物を仕舞い込んでいたとしても、父の身の廻りの物品、ないしは父の興味を惹（ひ）いたごく些細（ささい）な品品だったに違いない。例えば、片方を失くしてしまったカフス釦（ボタン）とか、記念のメダル、新聞の切り抜き、古びた手帖、それから道傍でふと目をとめて拾って来た小石とか……。要するに、それらのこまごました物品は、他人には全く価値がなく、ただ父個人にとって何らかの愛着が籠っている、といった種類のものである。私が是非見たいと思うのは、そういうこまごまとしたものなのだ。

父の死後、家にかなりの負債が累積していたことが判明し、加えて父が生前保証に印をついていた厄介な問題もからんで来て、結局私たちの一家は郷里の財産をすべて整理し、近くの街に出て住むことになった。尤も実際に街へ引き移ったのは、父が死んでから数年目で、私が九歳のときだった。父の三周忌の法事を済ませたあと、私たちは父祖伝来の家を引き払ったのである。その際、古びた家財は全部整理してしまったから、私は以後、ついぞ船金庫を見掛けたこともなかったし、またそんなものなど思い出してみたこともなかった。

しかし、父の死亡年齢を過ぎた現在（いま）になって、何となく私は船金庫のことが気になるのだ。父が死んだのは昭和六年だったから、もう四十年以上の歳月が流れている。その四十年以上の昔に、父が私とほぼ同じ年齢で、どんなものを船金庫の中に納めていたのか。とりわけ隠し抽斗の奥に、一体何を隠していたか。私は隠し抽斗の奥でコトコトかすかな音を立てているE父の骨の一片を想い浮かべているのである。

（長谷川修「舞踏会の手帖」による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

問一 傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 18 、イが 19 。

ア コウミョウ

ⓐ ホームページをコウシンする
ⓑ 失敗はセイコウのもと
ⓒ 集客コウカのある取り組み
ⓓ セイコウ法で問題を解く
ⓔ セイコウに作られた模型

イ ナンパ

ⓐ ハケン社員として働く
ⓑ 廃屋を重機でハカイする
ⓒ 水面にハモンが広がる
ⓓ 中途ハンパな内容の本
ⓔ 選手権のハシャとなる

問二 傍線部A「現実」とはどのような現実か。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 20 。

ⓐ 老眼鏡をかけることで違ったものに見える現実
ⓑ 細部が見えすぎる社会に生きているという現実
ⓒ 老眼になってから父が見たのと同じ現実
ⓓ 父が亡くなった年齢以降に自分が見る現実
ⓔ 父がこの世の中に存在しないという現実

問三 傍線部B「私の判断力は、近くの細部が見えていたときよりも間違わなくなる筈（はず）」とあるが、その理由を説明したものとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 21 。

ⓐ 老眼鏡をかけずに細部が見えるようになったから。
ⓑ 細部にこだわりすぎると全体が見えなくなるから。
ⓒ 老眼鏡なしでも自分に必要な細部はよく見えるから。
ⓓ 判断力は老化現象に比例して衰えるから。
ⓔ 遠くのものが判断の妨げになることがあるから。

問四　傍線部C「以前とは違った形」とはどのような形か。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 22 。

ⓐ　見たいものも、見たくないものも見えない形
ⓑ　何気なく見るのではなく、注意深く見る形
ⓒ　これまで気づかなかったことがわかるような形
ⓓ　見たくないのに実際に見えていないことまで見える形
ⓔ　自分が興味・関心のないものも排除しない形

問五　空欄 X に当てはまる四字熟語として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 23 。

ⓐ　会者定離
ⓑ　合縁奇縁
ⓒ　色即是空
ⓓ　愛別離苦
ⓔ　生老病死

問六　傍線部D「私が興味を持つのは、銅鑼よりも、むしろ船金庫の方である」とあるが、その理由として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 24 。

ⓐ　感傷的な父の思い出よりも、父の興味・関心のあり方を知りたいから。
ⓑ　銅鑼は換金性が高いが、筆者は高価なものには興味がないから。
ⓒ　銅鑼と違って、船金庫には父が隠し持っていた宝が隠されている可能性が高いから。
ⓓ　銅鑼は大きく重く邪魔だが、桐で創られた船金庫は軽くて扱いやすいから。
ⓔ　銅鑼は打ち鳴らすもので、船金庫は鍵付きの抽斗のある実用的なものだから。

問七　傍線部E「父の骨の一片」とは何を表しているか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 25 。

ⓐ　幼い時のかすかな父との思い出

ⓑ　父が確かにこの世に存在したことを証明するもの

ⓒ　個性的な父であったことを教えてくれるもの

ⓓ　父が亡くなってからの長い時間の経過

ⓔ　借金だけを残して死んだ父が唯一残してくれたもの